

第1回 府立高校特色化推進プラン検討会議（概要）

1 日 時 平成24年8月7日(火) 午後3時から同5時

2 場 所 京都平安ホテル 朱雀の間

3 出席者

(1) 委員10名（欠席2名）

(2) 府教育委員会 石田管理部理事管理課長事務取扱、西村教職員課長、
古市指導部理事、藤井高校教育課長、川合保健体育課長ほか

4 概 要

(1) あいさつ

(2) 委員紹介

(3) 趣旨説明等

- ・ アクションプランは、府政の課題に対して、府民に参画いただき、オープンな議論を通して、新たな行政施策を創っていかうとするものであり、「府立高校特色化推進プラン」もその一つとして、平成24年度新規プランとして検討するものである。
- ・ 高校教育の大きな転換期を迎え、府立高校の教育改革を積極的に推進する観点から、施策の方向性を具体的に検討したい。検討項目としては、①「府立高校全体のレベルアップ」、②「各府立高校の特色化の推進」を柱とする施策について、考えている。

(4) 協議（主な意見）

■府立高校全体のレベルアップ

ア 質の高い学力の育成

- ・ 大学入試をテコにした学力の担保が難しくなっていると言われて久しい。大学入試センター試験を中心として入試を行っている大学は少数であり、約50%の大学がAO入試などの形式で生徒を確保している。マークシート方式に応じた学力の付け方では現在の大学入試には対応できなくなっている。
- ・ 大学進学にあたり、推薦入試と一般入試の受験料や入学料などの必要経費は非常に高額になる。昨年度あたりから、保護者が金銭的負担に耐えられないと、一般入試を受けずに推薦入試で決めたいという生徒が増えてきている。学力の問題だけではなく、家計の問題もあいまって、生徒の精神的不安が非常に大きくなっており、今までの取組では対応が難しくなっている。
- ・ 企業の方から、子どもたちのモチベーションの問題が非常に重要であると言われる。大学生が就職する際に、与えられたことを精密にこなす力だけではなかなか社会的には立ちいかない。グローバル社会の中で、若者の外国へ行く、あるいは、積極的に物事に取り組もうとする意欲が減退していると言われると、果たして我々がつけるべき学力とは何であろうかと考えさせられる。大学入試への対応とともに、新しい学力の基軸を設け、その対応策を打ちだしていかないといけないのではないか。
- ・ 「受験に関係ないから」と受験科目以外は勉強しない生徒もいる。そういう生徒たちには何をモチベーションに勉強をさせるべきかを考えなければならない。高校を出て大学に行くための価値観だけで学力を捉えるべきではない。

- 「府立高校実力テスト」は、国の学力実態調査よりも相当早い時期から実施している先進的な取組である。学校現場にとっては、入学後の生徒の伸び率を検証する上で貴重な資料であるが、もっと幅広い活用ができないかと思う。現状では、学校によって活用方法に差がある。

高校入学段階での生徒の学力実態は大きく変化している。自校の生徒の学力実態を把握する上で、実力テストの活用の工夫がより必要になる。活用方法の工夫によって、生徒の学力上の課題を一層明らかにすることができると思う。テスト結果を活用した指導方法の改善方法についての交流機会もあるとよい。
- 「府立高校実力テスト」について、校内での分析体制ができていない学校もある。また、統一問題で学力幅も広いので、高得点をとる生徒が多い学校もあれば、学力的な課題のある生徒が多い学校もあるなど、学校によって扱いは難しいが、変化率に観点を置いた活用についてもう一度見直す必要があると思う。活用方法について、先進的に実施している学校をモデルにしたり、モデル校の教員をインストラクターにして他校の教員にレクチャーするなどの工夫も必要である。
- 「府立高校実力テスト」は他府県に誇れるものだと思っている。この実力テストの問題作成を現場の教員が担うことによって、教員の実力がかなり上がったのではないかと。問題作成にあたって、いろいろな勉強をし、また、教員が互いに切磋琢磨したことが、教員の実力アップにつながり、それが生徒の学力アップにもつながったのではないかと思う。

ただ、残念ながら、府の予算削減により、テストの内容が英数国の3教科に削られてしまった。教員の指導力アップと生徒の学力アップという観点からも、再度、教科数等を拡大してほしい。また、業者に委託するなどして、長期にわたる蓄積データをもとに、子どもたちの励みになるような分析をしてもらいたい。
- 他府県では、地元の公立高校からは良い大学にいけないから私立高校に行くという話を聞く。地域性にもよるだろうが、進学に関しては、京都の公立高校ほどの高校においてもしっかりと取り組んでもらっており、本当にありがたい。

イ 豊かな人間性の育成

- グローバル化が進展する中では、日本のことだけではなく、世界のことも見据えておかなければならない。例えば、ある日本の企業で採用された日本人の割合は全体の20%であったと聞く。こうした時代の流れに合った学力を養成していかなければならない。

基礎知識をつけることは大切であるし、それを活用する力も必要であるが、このままでは日本は大変なことになってしまうのではないかと危惧する。シンガポールやマレーシアでは、朝8時から夜6時まで学校で勉強をしており、現地の日本人教員は「このままでは日本が負けてしまう。」と不安視している。外国の生徒に負けない“意欲”を生徒たちに身につけさせることも大切ではないかと思う。
- これまで我々は、進路指導等において「自己実現」と言い続けてきた。それはそれで大切だが、「自己肯定感」や「使命感」についても教えるべきであったと思っている。各高校が特色化を図るほど、「自己肯定感」や「使命感」をしっかりと教えていくことが大切であり、そのことが総合的な学力にも密接につながるのではないかと考える。
- 高いレベルの学力伸長対策に取り組むとともに、学校の秩序や学びの環境をレベルアップさせる取組も必要である。例えば、頭髪や身だしなみ。時間をしっかり

り守る。きちんと挨拶をする。きちんと授業を受ける。テストが悪かったら補充をするといった指導の徹底である。

学力的に課題のある生徒も、学力を伸ばしたいという思いを必ず持っていると思っていて個別対応などを行っている。逃げ続けようとする生徒にも、高校はうるさくてしんどいところだけど、頑張らなければいけないということを理解させることが大切であるが、そうした生徒に関わる労力が足りないのが現状である。

- ・ 府の「高校新卒未就職者緊急支援対策事業」の対象は、高校新卒者で未就職の方であるが、その方たちに不足しているものは、当たり前前の方が当たり前前できていないということである。挨拶や返事をする、字を丁寧に書くという、家庭レベルで教えられることばかりであるが、そうしたことを4月から7月までの4か月間、きちんと研修を続けた結果、ほとんどの方が就職することができた。学力は大切で欠くことのできないものだが、企業が求める人材は、「普通のこと普通ができる」「家庭における教育ができていいる」ことだと感じた。家庭の役割とも思うが、現状では、そうした力をつける指導が高校にも求められている。
- ・ スクールカウンセラーの立場からすると、今の高校生には幼く未熟な自我の状態の子が多いと感じている。高校生になれば、自分で考えて行動し、決断するのが当たり前だと思いがちだが、今の高校生は、他人にしてもらうことが当たり前で、大人に対しての要求が高く、非常に脆弱な自我が基盤にあるために、大人が少し強く圧力をかけると、人間関係をいきなり断ち切ってしまう状況に陥りがちである。こうした生徒の実情を先生方が正しく理解する必要がある。高校では自我が育った自律的な生徒を前提として指導しがちだが、生徒の弱さと向き合い、生徒たちの力を正確に見極めて指導をすることでよりよい指導になると考える。
- ・ 核家族の中で生まれ育ち、物心ついたときには当たり前前にゲームや携帯電話があるという環境の中で、どうすれば子どもにコミュニケーション能力を身につけてやれるのかと思う。保護者としては、どこに子どものスイッチがあるのか、いつも探し続けなくてはならない。
子どもが嫌がったとしても、挨拶や返事など、教えるべきことは教えなければいけない。自分たちが上の世代から教わってきたことは、次の世代に伝えていく義務があると考えている。
- ・ 総合的に強い人間を育てるためには、部活動も経験させなければならないし、だめなことはだめと言いつけなくてはならない。しつけとは「し続けること」と言われている。高校と保護者の方とが一緒になって、しつけをしていかなければならないのが実状である。

ウ 学校の教育力の向上

- ・ かつてとは求められている学力が変化しているということになると、画一的に受験指導をしているだけでは、社会に求められる人材を育成できない。多様なニーズに応えられる多様な力をつけるための指導の工夫が求められている。
- ・ 中学校では、「教えあう」という指導方法をとることがあると聞く。中学校では当たり前らしいが、高校ではそうした手法はほとんどとらない。また、小学校では、調べ学習などで教えあうことによって、学力の定着率を高めているとも聞く。現状では高校の授業改善につなげられていないが、そうした手法に学ぶことも必要である。

- 海洋高校において、小・中・高間の連携・交流を通じて、小・中学生が高校への理解を深めることで、高いモチベーションを持って海洋高校への進学を目指す生徒が増えたという実践例を聞いた。また、東宇治高校でも高校生が小学校に行き英語を教えるといった交流が行われているが、小学生に喜ばれると同時に、教える立場の高校生にとっても学びの機会となり、学力の向上にも結びついていると聞く。しかし、こうした取組はなかなか一般化されない。日本の教育は6・3・3・4制であるが、義務教育6・3、高校3、大学4の3つにはっきり分かれてしまっている。高校は「3」の中だけでもがいているのではないだろうか。
- 個別の支援計画の作成が高校にも求められてきている。生徒の多様なニーズに応える指導の工夫改善を行っていかなくてはならない。
- 一昨年からは、総合教育センターで特別支援教育の出前講座を実施しているが、最近、高校からの要請が増えてきている。北部の分校と南部の高校では異なる状況もあるが、いずれの高校でも、発達障害のある子どもたちやその周辺に位置する子どもたちの支援に苦慮している。高い高校進学率のもと、様々な生徒が入学している。対人関係に課題のある生徒への支援が課題である。
- 「一人一人を大切にすること」ということは、多様なニーズに対応することだが、実際に高校で一人一人に対応するには無理がある。思春期の課題からみても、手取り足取り指導することがよいわけではない。

先生方と話をする、生徒の大人に対する要求が非常に高いとひしひしと感じる。生徒たちは、「分かるように教えてほしい」と、「分かるように学力をつけてほしい」と思っているが、分からないと暴言を吐く、教室を飛び出すといった行為に出ることも多い。個別の対応だけでなく、授業の改善や学級経営の改善を併せて実施していくなど、集団の観点をもって、学校体制の中で指導していくことで非常に効果が上がると考える。
- 発達障害の子どもの割合は、文部科学省の調査によると6.3%であるが、発達障害と限定せず、気になる子どもとすると、現場の先生の実感では全体の2割ぐらゐは該当するようだと聞く。2割となると、一部とは言いがたい。
- 巡回教育相談の際に、中学生の進路について相談を受けることがあるが、私立高校は一人一人丁寧に見てもらえるが、公立高校はそうでもないという話がある。個人的な意見ではあるが、失敗したときにどれだけフォローしてくれるかの違いではないかと考える。

最近の子どもは、成功からは学べるが失敗からは学べないとよく言われる。私立高校が「一人一人に丁寧」だと言われる裏には、失敗してもフォローしてくれるし、何とか頑張れと支援してくれるという思いがあるのではないかと。

それに対して、公立高校は、例えば、自校の特色に乗ってくる子には熱心だが、失敗したら丁寧には見えてくれないという印象をもたれているのではないかと。各校の特色に合わなかった生徒をフォローし、卒業や卒業後の進路に結びつけていくことが大切である。例えば、府立高校には、全校にスクールカウンセラーや特別支援教育コーディネーターが配置されている。生徒指導、教務、進路などの各分掌の先生方とスクールカウンセラーや特別支援教育コーディネーターなどが、校内組織として一丸となって特色を打ち出し、集まってきた生徒が安心して失敗できるような校内体制づくりが求められる。

そうした取組が口コミで広がることで、「府立高校は一人一人丁寧に見てくれる。私立に行かせる必要はない」という評価につながっていくのではないかと。

- ・ 今年度、新規施策として打ち出された「京都フレックス学園構想」に注目している。より幅広い、多様な学習ニーズに柔軟に対応する新しいタイプの高校となれば、様々な子どもが入学してくると考えられる。準備したものに乘ったらフォローするというのではなく、生徒が乗れるように、自己実現できるようにフォローする体制を作っていくために、現行の校内体制を十二分に発揮させるとともに、プラスアルファでさらに支援のための体制整備も必要である。
- ・ 昨年度から、府の「京都式専科教育推進事業」により、本校の書道の教員が小学校に出向いて授業をしているが、非常に好評を得ている。高校の教員の専門性を生かした連携策であり、今年度からは音楽の授業にも拡充した。こうした取組が府立高校の魅力を高める機会になっているが、取組を推進するためには、ある程度の教員数の確保が必要であるので、ぜひお願いしたい。
- ・ この間の入試制度の変更に伴い、府立高校の入学生は各校で大きく異なっている。学力か部活に絞って特色を出すことが非常に難しくなっている中、現在措置されている府単費による人的措置が今後どうなるかということが非常に気になる。今後の府立高校においては、特色化加配のような人的措置が必要である。時間軽減措置も含め、何らかの新たな府の単費措置をぜひお願いしたい。
- ・ 府立学校の管理運営規則に規定されている校内の分掌は、ずっと見直されていないが、実際には、各高校において、学校の特色づくりなどを推進するための新しい形の分掌を設置している。分掌の在り方を見直し、必要な部の部長等には軽減措置を行うなど、時代に合わせた組織強化をぜひお願いしたい。
- ・ 施設が整わなければ何もできないということではなく、また、施設が悪いから、条件が整わないから諦めるということではなく、どのような条件であってもやるべきことには取り組まなければならない。職員が一丸となって同じ方向を向いて働けば、条件面が整わなくてもある程度のことではできるはずである。
- ・ 山城地域は早くから高校を選ぶことができるようになったため、自ら高校を選ぶという意識が中学生の中にもかなり浸透している。中学校の早い段階から高校を選ぶ意識が備わってきていると感じている。特に、学校ごとに入試の合格ラインに差があり、競争が激化しているところもあるように思う。生徒は、学習に対して意欲があるので、優秀な生徒が多く集まる学校では、当然学力を伸ばしやすい反面、そうでない学校では生徒指導が大変だという状況もある。子どもたちは、大学進学を考えたり、中学校の早い段階から高校を選ぶ意識ができてきていると感じている。
- ・ 「あんしん修学支援制度」の拡充により、私立高校が選びやすくなっていることもあり、3月の公立高校の入試まで待てない生徒も出てきている。併願で私立高校に合格していれば、2月の公立高校の特色選抜や推薦入試に挑戦してダメなら3月の公立高校の一般選抜を待たずに私立高校に行ってしまう。中学校としては高校に進学した後に通用する学力をつけてやりたいと思うが、入試制度によって大きく左右されている現状がある。
- ・ 授業料の実質無償化が進む中で、私立高校と公立高校を比べると、入口の入学選抜の段階で非常に大きなハンデがある。私立高校に合格した時点で公立高校を受験しない生徒が増えている中、公立高校では唯一2月に適性検査を行っている

る学科だけが、私立高校と同等に競争できている。現行の入試制度、特に総合選抜制度の課題は大きい。

- ・ 教員が学び合えるような連携策が、生徒の学力の向上にもつながると考える。一方で、教員だけでできることには限界がある。各分野のプロのノウハウを取り入れていくべきである。例えば、地域の方の中にも多才な方がたくさんおられるので、そういう方々が、学校で生徒に教えていただくとよいと思うが、外部の方に来ていただくと費用がかかるため、ほとんど何もできないのが実状である。高校教育課の事業経費が配当してもらえた年は充実した取組ができるが、その事業が切れたらどうすればよいかと思案しなければならないという繰り返しである。効果的な取組が継続できるような支援策が必要である。
- ・ 特色が顕著な学校は生徒の通学区域も広域化するが、多くの高校は地域に根ざすしか手はない。学校の近隣に住む生徒を一番の主力と考え、地域に高校の取組を理解していただくことが大切である。高校3年間だけを捉えるのではなく、小学校や中学校、地域とつながる取組が、生徒のキャリアにつながることになる。
- ・ 数年前、ある高校に統廃合の噂がたった時、当時の校長先生やPTAのみなさんが一体となって高校を守ろうと、入学した生徒をいかに伸ばすかという教育を実践されていた。その後、自分の子どもがその高校に入学した際には、そういう教育をしていただくと期待していたのだが、学校の存続がかかっていた頃に比べると、危機感がないように思われた。
入学してきた子の力を伸ばすということは、一つの特色だと思う。当時の先生方には学校存続の危機感がすごくバネになっていた。特色化を図っても、現場の先生方がモチベーションをもって取り組まなければ空回りする。公立高校と私立高校の垣根がなくなってくるということをもっと意識してほしい。熱心に取り組む先生もいれば、そうでない先生もいて、本気で取り組んでくれるのかと不安になる。先生方がきちんと現状を把握し、危機感を持つことが大切である。
- ・ 「危機感をもつこと」には、本当に同感である。学校現場に携わる者は、いつの時代においても、子どもたちに希望をもたせること、危機感を持ち続けることが非常に大切なことである。

■各高校の特色化推進

ア 魅力ある高校づくりの推進

- ・ 中学生は、各府立高校の体験セミナーなどに参加し、高校の教育内容に触れる機会が多くなってきているが、その時の生徒の反応を見ると、中学生にとって高校は、「この高校に行ったら自分はこんなことをしてみたい」という「憧れ」が必要であるべきだと思う。
府立高校に様々な特色や魅力があると、選ぶ側の中学生の選択肢が広がる。多様な進路の中から、将来の高校生活に夢を描けるようになればと思っている。
- ・ 中学校の進路説明会では、生徒に、「初めて自分で進路を決める機会なので、自分の進路を一生懸命、真剣に考えてほしい」と話をするとともに、保護者の方には、生徒自身がなかなか将来像を描きにくくなっている状況もあるので、「家庭でも、進路や将来について日頃から話題にしてほしい」とお願いをしている。
各高校においては、子どもたちが、「あの高校に行ったらこういうことがしたい」

と思えるような特色づくりをしていただければありがたい。また、そういった特色を自分や自分の将来と合わせて見極められる中学生を育成しなければと思っている。

- ・ 小・中学校間では、校種を超えて、例えば算数・数学について話をする機会が結構ある。中高の間でも最近そういう機会が増えてはきている。高校での学習の中で、「中学校時代にもっとこういう力をつけておいてもらえればさらに力が伸ばせる」といったことは、中学校の教員としては参考にさせてほしいので、様々な連携の機会を広げていければと思っている。
- ・ 丹後地域の小・中・高校連携事業において、校種を超えて、高校の公開授業をみる機会があった。小学校の教員からは、「高校の授業はこんなふうにするんでいくのか」「こういうスピードで進んでいくのであれば、小学校でも、そのことを視野に入れて考えていかななくてはならないことがあるのではないか」などの気付きの声が聞かれた。中・高間、小・中・高間での学力面での連携ができれば良いと思う。そのことが、結果として、高校のレベルアップや中学校で力を付けて高校に送るということにもつながる。中学校としても積極的に取り組んでいかなければならないと思う。
- ・ 中学校においては、生徒が高校を選択するにあたって、目的意識を持つこと、また、自分の生き方や使命感について考えることが大切だということを指導していかなければならない。また、子どもたちが成長していく過程を考えれば、小・中・高を通した指導についても考えていく必要がある。府の教育振興プランで示されている視点は、大変重要であり、そのことを踏まえた指導が大切である。
- ・ 高1ギャップを感じている生徒もいるが、逆に、高校に行って生き生きしている生徒もいる。中学校でも、挨拶やいわゆる社会人として身につけておかなければならない力をつける指導を行っているが、高校に進学した後に、部活動を通じてそうした厳しさを教えられるという生徒もいる。
高1ギャップを感じている生徒には、中学校の担任を中心に、「とにかく高校でがんばってみよう」「自分が選んだ道を進んでみてももしも何かあれば話しにおいで」というような話をして、中学校としても子どもたちを陰から支えるよう、努力している。各高校から中学校に、「実はこういう状況がある」ということも含めて、連携をしていただけるとありがたい。子どもを真ん中において、中高が一緒になって考えていければと思う。
- ・ 丹後地域及び中丹地域の文化系クラブがそれぞれ一堂に会し、「丹後文化祭」、「中丹文化祭」を開催してきた。そうした中で、中丹地域においては、昨年度から、中丹広域振興局や中丹教育局が中心になった「由良川元気サミット」と「中丹文化祭」を合体して実施することとした。こうした取組が、今後の府立高校の在り方の一つではないかと思う。高校生の発表を小・中学生が見ることで、「ああいうお姉ちゃん、お兄ちゃんになりたい」という希望をもってくれる、また、吹奏楽や書道、美術などへの意識や関心が広がっていくと考えている。
- ・ 自分の住む地域に高校生が学んでいる、府立高校があるということは、地域にとって「文化」である。例えば、府立高校の吹奏楽部の定期演奏会や文化祭などを通じて、小・中学生が自分たちよりも上のレベルの作品に触れたり、スポーツ活動をみたりできる意義は大きい。「自分たちもああになりたい」「あんな絵を描きたい」「あんな字を書きたい」「ああいうことがしたい」と思えることが、一つ

の地域の文化だと言える。定期演奏会や展覧会などの看板があるだけでも、地域にとって与える影響は大きいと思う。高校生が頑張っている姿を小・中学生や小さな子どもたちが間近に見られるということに大きな意味がある。高校生が一番身近なお手本や憧れになってほしい。

- ・ 高校生にボランティアで、中学校の夏季講座に教えに来てもらっている。「ふりかえりスタディ」などで、いろいろな方に指導をしていただいているが、身近な年代の高校生から教えてもらうことは、高校生を身近に感じる機会でもあり、また、大人には聞きにくいことが聞けるなど、中学生にとって非常に効果が高い。
- ・ 宮津高校の建築科から、「福島県の幼稚園に『ままごとハウス』と一緒に贈る積み木を作ってもらえないか」と提案があり、生徒会に伝えたところ非常に乗り気で、前向きに取り組んでくれた。ボランティアを募ったところ、多くの生徒が集まった。高校生の取組と一緒に参加するということはすごく貴重で大切なことだと感じている。高校の近くにある中学校の特権であり、このような機会を大切にしたい。生徒たちにとって、身近に自分たちの目標や手本があることは、地域にとってもすごく大きなことであり、中・高の連携の視点として大切にしていきたい。
- ・ 一昨年度末、母校の小学校が統合され、学校がなくなるということは地域の基盤がなくなるということだとつくづく感じた。また、それまで、3キロ離れたところから毎日通っていた児童は、3キロを6年間何千回と歩く道すがらの中で培ってきたものがあっただろうと思うが、そうした経験もできなくなってしまった。それをどこでどうカバーしていくのか。子どもの少ない地域としては大きな課題である。
- ・ グローバル化社会の中では、自ら運命を切り開いていくような力を付けてやることも必要であるが、一方で、その土地に生まれ育ったことをいわゆる定めと感じてそこで生きていく、そのために必要な力や学力を養うことも大切である。学校は地域の基盤である。生まれ育った地域を守っていくためには、学校と地域の行政との連携が必要不可欠である。町の描く未来図とその地域の学校の特色がリンクすることが望ましい。
- ・ 府立高校の点と面を強みにできないかと思っている。全校が、難関国公立大学進学を目指すことは、現実的ではないし、非常に大きなロスがある。公立高校の利点は、公立高校間で広くつながることができることだと思う。学校間でノウハウを生かし合って連携することも大切ではないかと思う。
- ・ 府立高校には教員がたくさんいるということが利点である。府立高校間の競争は続くと思うが、府立高校全体でレベルが上がれば、難関国公立大学に進学できる生徒は増えるし、府立高校がお互いの特色を生かし合うことで、府立高校を希望する中学生も増えると思う。府立高校間で連携し、それぞれ得意分野を分担するようなしくみができると特色化に相乗効果ははたらくのではないかと考える。
- ・ 教育課程上、例えば、土曜日に授業をしようと思っても府立高校では実施できない。昨年、土曜活用の検討会議が行われ、今年から試行的にモデル事業が行われているが、この点でも私立高校とは非常に大きな差があるといえる。府立高校独自に規制緩和を行い、私立高校と同等のことができるようにする必要がある。

- ・ 中学校で不登校などを経験した子どもたちにとって、高校進学は心機一転の機会であるという思いが強く、彼らの進学意欲を大きく膨らませている。また、近年の経済情勢から、手に職を付けるという意識が中学生や保護者の中で高まっており、専門技術を身につけられるような学科が求められているように思う。
- ・ 中途退学も含め、途中で挫折をした生徒への対策についても検討してほしい。通信制や単位制など、中途退学者の受け皿として、教育相談的な対応を中心にしてもらえる高校があることはありがたい。特別支援教育の視点や精神医学の知識を取り入れて、丁寧に対応してもらっていると感じているが、もう少しそうした学校を増やしていくことも必要である。
- ・ 山城通学圏では、公立高校の合同説明会の開催や各府立高校の学校公開の回数増などによって、中学生が高校を知る機会が増えてきた。各学校のパンフレット類や様々な学校公開の案内なども、生徒数分準備していただいております、高校側の中学校に向けての発信は、ここ数年かなり強化されてきている。
部活動体験や学校公開に参加する生徒数も増えてきている。これまで公立高校では、専門学科については夏休み中に学科体験などが行われていて、それに参加する生徒は多かったが、最近は普通科についても数多く説明会などが開催されており、非常に良いことだと感じている。
- ・ 私立高校からは、毎年、公立中学校に来ていただいて、新入生だけではなく、2年生、3年生、卒業生も含めて、今どういう状況である、どういう進路を考えている、どこへ進路をとった、あるいは在籍途中で進路変更をしたといった情報をたくさんいただける。
しかし、公立高校の場合は、入学当初の中高連絡会のみで、それ以後、例えば途中で進路変更をした生徒があっても、その子が中学校に相談に来るまで分からないといった状況にある。生徒や保護者全体への情報発信はされているが、中学校との連携という部分についてはもう少し強化してほしい。

イ 教育環境の整備・充実

- ・ 部活動で結果を出すには、やる気のある生徒、素質のある生徒がいて、熱心な指導者がいて、常時使用できる施設があることが必須となる。
高校段階で、どのレベルまで目指すのかということもあるが、成果を出そうと思えば、競技によって異なる点はあるが、3年生のインターハイまでの2年2か月でいかに選手育成をするかという点にかかってくる。
少なくとも京都の中で上位を目指そうとすれば、アスリートとしての素質ある子どもたちを広くリクルートする方法が一つ。また、附属中学校がある、校区にしっかりと連携できる中学校がある、あるいは総合型スポーツクラブを通してジュニアから育成していくという方法も考えられる。今年も全国選抜に出ている網野高校のレスリングや久美浜高校のカヌーなどは、ジュニアからの育成が高校にきちんとつながっている成果と言える。
- ・ 部活動において、広範囲から生徒をリクルートするということになると、それを受け入れる施設が必要となる。きちんと栄養管理ができる寮を整備し、生徒の育成を図れば、全国トップレベルの選手育成が可能となる。例えば、女子駅伝で、創部6年のうち3回全国優勝した愛知県の豊川高校は、寮生活の中で選手の心身の管理をしながらトレーニングしている。私立高校と公立高校の差は、リクルート力と生徒を育てる施設があるかどうかである。
府立高校は全国の公立高校の中では部活動の成果をあげている方だと思うが、

さらに高校の特色として打ち出す、あるいは、結果を出すには施設面も含めた思い切った施策が必要である。

- 本校には、府内全域から希望ができる普通科系の専門学科を設置しているが、実際には、数年前までは、地元からの進学者ばかりであった。最近になって、市外からも来てくれるようになったが、つい最近の体験セミナーで、多くの保護者の方から「この高校に行かせたいが自宅から通うには遠い。寮があればありがたい」という意見をいただいた。もし寮の整備がかなえば、遠距離通学をしている生徒たちも、電車の時間を気にしなくてよくなる。府立高校の特色化を進める上で、ぜひとも寮の整備を考えてほしい。
- 例えば、宮津市にある私立高校は、広い地域から生徒を確保するために通学バスを走らせている。しかし、公立高校にはそうした通学手段がないため、中学生が希望する公立高校に行きたくても行けないという状況がある。寮の整備も必要だと思うが、保護者の中には自宅から通えることに安心感を抱く方もいる。北部地域では、18歳で家を出るということが多いが、15歳でとなると保護者としては不安もあり、躊躇される保護者もおられる。鉄道もバスも走ってはいるが、便数が少ないため、高校で部活動や勉強をしたいと思っても、時間を制約される。私立高校のように通学バスなどがあれば、さらに子どもたちの選択の幅が広がっていくと思われる。現にそういわれる保護者もおられる。
- 例えば、文部科学省のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けると数千万円という非常に大きな予算がつくが、指定される高校は「その他専門学科」の設置校であるなど、一定の制約がある。府として、特色を出しにくい学校が特色を出す上で必要な予算を新たな事業として措置してほしい。例えば、現在の学力向上フロンティア事業を拡充する形でもよいが、府立高校の特色化を推進するための事業をぜひ施策化してもらいたい。
- 高校の特色化を支える条件面の整備をもっと考えてもらえるとありがたい。通学バスなどいろいろなことが考えられる。あんしん修学支援制度によって、私立高校と府立高校の費用面での条件は同じようになりつつある。
府立高校で様々な条件面が整備されれば、さらに子どもたちのニーズに対応できるのではないかと思う。広く生徒が集まってくることによって、さらに学力や部活動、文化活動など、高校の教育内容のレベルアップにつながっていくのではないか。
- 地元の中学校を卒業して、地元の高校を出て、頑張っている先輩の姿に触れることは、今の丹後地域に住んでいる子どもたちにとっては大きな励みになっている。府立高校の様々な特色化の歩みを、日常的、継続的に支えられるような様々な条件整備についても検討する必要があると思う。そのことが、今まで築いてきた府立高校の特色の継続発展や今後の特色づくりに大きく寄与するものと思う。